

リエゾン子音の位置に関する一考察

近藤 野里

(東京外国語大学大学院)

フランス語のリエゾン現象の音韻的定式化への試みは 1960 年代に CHOMSKY & HALLE によって書かれた SPE (Sound Patterns of English) 以後の生成音韻論の発展と共に行われた。この定式化は、語が単独で発音された場合に読まれない子音字を基底表示においてどのように表示するかという問題を扱う試みといってもよいだろう。特にその始まりは SCHANE (1968)が提示した削除規則である。その後、現在に至るまで様々な規則が提示されてきた。

本発表では、まずリエゾン子音を MOT1 (左側の語) の基底に表示する方法、MOT2 (右側の語) の基底に表示する方法、そして MOT1 にも MOT2 のどちらの基底にも表示せずに挿入子音として扱う方法の利点及び欠点を考察する。その上で、リエゾン子音の位置を一つに絞る必要があるのか、または複数の位置を持つ可能性があるのかという点について考察を行いたい。